

## 病の身体、意識の身体

— 田山花袋「一兵卒」論 —

王 梅

### はじめに

一九〇八年一月に、田山花袋は日露戦争を背景とする「一兵卒」を『早稲田文学』に発表した。「一兵卒」は一九〇四年八月三十一日の夕方から九月一日の黎明まで、いわゆる「遼陽会戦」という歴史の流れに属する八、九時間の中で、無名の一人の兵士「渠」が見聞し、連想し、感覚したことを描いている。読者が目の前に見せられるのは日露戦場を舞台に脚気衝心の兵士が死に至るまでの心理である。

小説は自然に三つのパートから成り立つが、場所的には前半（一、二）と後半（三）という二つの部分に分けることができる。兵士が入院していた大石橋の病院の不潔に耐えられず、軍医の制止を振り切って退院し、連隊を追っていくため、満州の野を歩きつづける部分と、兵站部の洋館に移動する身を止め、そこで脚気衝心の昂進で、死に立ち向かう過程という部分である。前半の語り手は「渠」の行動を外側から語る言説を挟みつつ、基本的には「渠」の身体と一体化し、「渠」の眼に映る光景や耳に聞えるものや肉体に感じる苦痛などを現前させていく。<sup>(1)</sup>つまり、「渠は……」小説でありながら、一人称の構造が現れている。後半では「渠」の生理的な苦痛を内側から身体的に現前する

かのように語ろうとする語り手は、次第に「渠」の身体から離れ、説明的叙述で「渠」の苦しむ姿を描写するようになる。

「一兵卒」である「渠」は、日本帝国の兵士として中国の東北地方にあたる戦場に派遣されたが、敵軍との戦いではなく、脚気の発作で亡くなったのである。花袋は第二軍私設写真班の一員として遼陽会戦の直前まで約半年ぐらい日露戦争に従軍していた。戦場の様子を『第二軍従征日記』に記録して、旅順陥落直前の一九〇五年一月に刊行した。ところが、その中では戦地で目撃したに違いない脚気の惨状に一言も触れなかったが、戦後陸軍における脚気蔓延の責任を追及する世論が起ると、脚気による苦悶死を題材とした「隣室」<sup>(2)</sup>（一九〇七年一月）、「一兵卒」<sup>(3)</sup>（一九〇八年一月）を発表したのである。

本稿では、戦場という特定の空間と、病という特定の精神状態において、人間の心理にどのような風景、変容および葛藤が生じるかを考察したい。まず、現代人のわれわれに馴染みがない脚気という病に注目して、脚気の歴史、近代日本社会における脚気言説を整理する。それから、日露戦争の歴史的記録を小説内の記述と対照しながら、小説の主人公が代表する兵士たちの身体が明治政府にどのような所有、管理されるかを分析し、さらに身体管理を通して「忠君愛国」という国

民としての自覚がどのように生成し、膨張するかも考察する。また、病の文化的な意味を視野に入れて、主人公「渠」の奥深い内面世界を探りながら孤独な「病兵」としての側面をクローズアップしたい。その上で、これらの個人としての意識と国民としての「忠君愛国」が葛藤しつつ、脚気衝心がもたらす肉体的苦痛に圧倒されることを明らかにしたい。

### 一 病の身体―脚気衝心という歴史

小説は「渠は歩きだした。」という冒頭でいきなり始まる。この一文からは三人称の客観小説という形を認めることができる。しかし、続いて「銃が重い、背囊が重い、脚が重い。アルミニウム製の金杖が腰の剣に当たってカタカタと鳴る。其音が興奮した神経を夥しく刺戟するので、幾度かそれを直して見たが、何しても鳴る。カタカタと鳴る。もう厭になつて了つた」という一段は、「渠」の内面が現れ、身体に感じる荷物の重量感や神経に障る音が当人が感受する形で示される。その後も、「腰から下は他人のやうで、自分で歩いて居るのか居ないのか、それすらはつきりとは解らぬ」、「苦しい、息が苦しい。かう苦しくては為方が無い」、「脚が重い、氣怠るい、胸がむかつく」、「眼がぐらぐらする。胸がむかつく。脚が氣怠るい。頭脳は烈しく旋回する」などが示すように、脚気衝心による生理上の苦痛が「私」が主語となる一人称の語りで語られてきた。

医学上の脚気というのはビタミンB1の欠乏によって心不全と末梢神経障害をきたす疾患である。脚気の症状は四つの型、「普通型または

軽症」、「萎縮型または乾性」、「浮腫型または水腫性」、「衝心型または急性悪性」に分類できる。つまり、まず足などの下肢の神経が麻痺し歩行困難となつてゆくところから始まり、浮腫などが起こり、心悸亢進などの循環器系が冒され、重症になるといわゆる脚気衝心と呼ばれる心臓機能が低下し、死亡に至る病であることが理解できる。<sup>(3)</sup>

冒頭部分の「渠」の症状は最初の段階で、つまり「普通型または軽症」である。この段階は「下肢の倦怠、重感、脱力感」があり、さらに病症が進行すると、「知覚神経、運動神経、自律神経すべてが侵される多発神経炎のため、知覚障害に平行して運動障害が進み、歩行困難となる。心悸亢進、呼吸困難があらわれ、脈は頻脈となる」という。<sup>(4)</sup>「渠」は連隊を追っていくために、歩き続けるが、「眼がぐらぐらする。胸がむかつく。脚が氣怠るい。頭脳は烈しく旋回する」のである。この段階の患者はまだ歩けるが、歩行困難、呼吸困難、知覚障害の症状を示している。脚気の二つ目の段階になると、運動障害が増加し、起立も歩行もできなくなる。歩き続けた「渠」はその後「歩く勇氣はなかつた」ことと、兵站部の洋館に移動する体を止めたのは、すでに脚気の症状が進行し、歩行不能になつたためである。そこで、「脚を固い板の上に立てて倒して、体を右にも左にももがいた」、「疼痛は波のように押し寄せては引き、引いては押し寄せる」、「軍帽は頸紐をかけたまま押し潰され、顔から頬にかけては、嘔吐した汚物が一面に附着した」こととなる。これは浮腫が下肢から全身に波及する三つ目の段階と、食欲喪失、嘔吐、意識は明瞭で、輾転反側して苦しみ、数日以内に死亡するという最後の段階の症状である。

「一兵卒」で「渠」の命を奪つた脚気という病は、日本でいつから

発生していたのか、はつきりしていない。しかし、『古事記』と『日本書紀』に脚気と同じ症状の脚の病が記載されており、平安時代以降、天皇や貴族など上層階級を中心に脚気が発生した。<sup>(5)</sup> 江戸時代に入ると、玄米にかわって白米を食べる習慣が広まり、上層階級のほか、武士と町人にも脚気が流行した。三代將軍家光が「脚気に罹患し、衝心死と推定される急死」し、十三代家茂も大坂城で脚気衝心のため、二十歳でなくなったという。<sup>(6)</sup> 元禄年間に江戸で大流行したため、「江戸煩い」とも言われるようになった。また、文化年間に大坂で流行し、「大坂腫れ」と呼ばれた。

近代に入って、脚気はますます激しくなり、結核と共に、国民病と呼ばれるほどになった。<sup>(7)</sup> 原因不明の浮腫に始まり、しびれ、倦怠感、知覚異常が現れ、重症の時には心臓発作でなくなることもある恐ろしい病気であった。特に発症率の高かったのは、都市に住む学生や兵士など集団生活を送る若い年齢層である。「富国強兵」という政策を打ち出した明治政府にとって、脚気はその「強兵」を脅かすものとして、頭を悩まされる種となった。

明治政府は欧米列強に伍して国家的自立と強国化を実現するために、経済力と軍事力の増強は一番有効な手段と考え、「富国強兵」というスローガンを訴えた。一八七三年政府は近代的軍隊を作るために「徴兵令」を定め、原則として二十歳以上のすべての男性に三年間の兵役を義務づけるように要求した。これにより、「国民皆兵」の時代に入ったと言えよう。江戸時代の武士の集団と違って、明治の近代的軍隊は国の管理と監督の下に置かれる特殊な団体である。明治政府は健康Ⅱ兵力という理念で、全国の青年男子に健康診断を行い、国民の中から体

が強壯な若者を選んで天皇制の精兵にした。しかし、脚気は軍隊に広まり、富国強兵の「病歴」となった。<sup>(8)</sup> 一八九四、一八九五年の日清戦争の陸軍では、戦死者九七七人に対して、脚気による死亡者は四〇六人であるという。十年後の日露戦争の時、全傷病者三十五万二千七百人の中、脚気患者は二十一万一六〇〇人を占める。<sup>(9)</sup>

「一兵卒」の「渠」は天皇制軍隊の一員であり、「強兵」として戦場に送られたが、脚気病に罹患し、脚気衝心で病死してしまう。兵士にとって戦闘による死傷であればまだしも名誉と称されようが、病気による後送や戦病死は「お役に立たない」どころが、「足手まとい」の不名誉とされかねない。「一兵卒」は、脚気の症状だけではなく、軍隊の飲食を通して、脚気病が蔓延する原因にも触れている。「渠」は二人の兵士の助けで、新台子の兵站部まで歩いてきたのは、兵士がご飯を食べるところであった。

兵站部の三個の大釜には火が盛に燃えて、煙が薄暮の空に濃く靡いて居た。(略) けれど此の三個の釜は到底この多数の兵士に夕飯を分配することが出来ぬので、其の大部分は白米を飯盒に貰って、各自に飯を作るべく野に散った。

現在では、脚気病の原因はすでに明らかにになった。それは農村の貧しい青年が軍隊に入ってから初めて腹一杯食べられる白米食と関わっている。白米食が始まったのは江戸時代、玄米を精白して糠を落としてしまうこと、および麦や穀類や副食物の摂取が不足することで、ビタミンB1が欠乏することが原因である。このビタミンの先覚的業績を挙

げたのが海軍軍医の高木兼寛である。海軍は一八八五年から改善食として麦飯を採用し、その結果脚気が激減していった。しかし、陸軍は脚気の原因は黴菌の空気感染にあると見て、麦食に反対し、米食を採用し続けた。その結果、日露戦争の時、海軍の脚気患者は八十七人、死者は三人であるのに対して、陸軍では患者は二十一人、死者は五七一人であった。<sup>(11)</sup>

以上、小説内の脚気言説に基づいて、脚気の歴史、発生状況、特に近代軍隊と脚気の関わりを整理してきた。「二兵卒」の「渠」を苦しめた脚気は、明治国家の「富国強兵」の「病歴」として、日本の軍隊の近代化に伴っている問題を明らかにした。

## 二 国に所有される「渠」の身体

日本の近代化は明治維新を起点に、軍事的国家建設を中心に、戦争を起こすことよって実現したと言われる。明治時代、明治国家は「日清戦争」と日露戦争を相次いで起こして、アジアの大国である中国とヨーロッパの強国であるロシアを負かした。戦争以外の時間も、次の戦争の準備と終わった戦争の始末に追われている。<sup>(12)</sup> 二回の戦争を通して、日本はアジアの国として世界の強国に仲間入りをすることを実現した。

「一兵卒」は日露戦争の遼陽会戦を背景に作られた小説である。小説の結末に、「渠」は脚気衝心に冒され、苦しんだあげく死亡した。「渠」が死んで一時間後、「しばらくして砲声が盛んに聞こえ出した。九月一日の遼陽攻撃は始まった」となる。この節では、日露戦争の歴史記録

を小説内の叙述と対照しながら「強兵」として戦場に派遣された「渠」の身体がどのように明治国家に管理されるかを見てみよう。

日露戦争は一九〇四年二月八日から一九〇五年九月五日にかけて、日本とロシアの間で、ロシア主権のもとにある中国東北部（満州）を主な戦場として発生した戦争である。陸軍の計画として、第一軍をもって朝鮮半島へ上陸、在朝鮮のロシア軍を駆逐し、第二軍をもって遼東半島へ橋頭堡を立て旅順を孤立させる。さらにこれらに第三軍、第四軍を加えた四個軍をもって、満洲平野にてロシア軍主力を早め殲滅する。<sup>(13)</sup>

「渠」が進む路線から見ると、「渠」が所属する「十八連隊」は第二軍の管理のもとにある。奥保鞏を司令官に、森林太郎（森隴外）を軍医部長としている第二軍は、一九〇四年五月五日から十三日にかけて遼東半島の塩大澳に上陸した。五月二十六日に死傷者四三八七人の代価でロシア軍の陣地である南山を占領した後、大連を占領した。五月三十日から東清鉄道に沿って北進した。六月十四日に旅順援護のため南下してきたロシア軍四万人と遼陽南方二百十キロメートルにある得利寺で激突した。二日間にわたる戦闘で、第二軍は側面攻撃を有効に用いて自軍より兵力の大きいロシア軍を撃退した。得利寺での勝利後、七月二十四日から二十五日かけて、大石橋での戦闘に勝利した。その後、遼陽を目指して北上し続ける。

小説の主人公「渠」は大石橋の病院に入院し、「敵の捨てて通げた汚い洋館の板敷き、八畳ぐらいの室に、病兵、負傷兵が十五人、衰頹と不潔と叫喚と重苦しい空気と、それにすさまじい蠅の群集、よく二十日も辛抱した」のである。八月三十一日に病院の不潔な環境に耐えら

れず、無理に退院して連隊を追っていくために出かけた。「闊闊とした野」を歩き続ける「渠」は絶えず「大石橋の戦争の前の晩」、「胸に弾丸が当たった」兵士など過ぎたばかりの激しい戦争場面を思い出す。さらに、他の兵士から「敵は遼陽の一里で一支えしているそうだ。なんでも首山堡とか言った」、「兵が足りんのだ。敵の防御陣地はすばらしいものだそうだ」と戦争に関する情報が耳に入った。歴史的記録によると、大石橋の戦いが終わってから遼陽戦争が始まるまで、つまり「渠」が入院している間、第二軍と共に、第一軍、四軍も遼陽を目指して進行している。八月四日に、第二軍は遼陽をうかがう位置まで前進した。八月二十四日の第一軍に続き、第二軍は第四軍とともに二十五日に作戦行動を開始した。遼陽会戦が始まるまで、第一、二、四軍は合計三六四〇人の死傷者が出て、兵力不足、弾薬不足など困難な境地に陥った。<sup>(14)</sup>

「渠」が他の兵士から聞いた「首山堡」というのはロシア軍が遼陽の南の方に張っている防御ラインであり、標高二〇九メートルの制高点でもある。八月二十八日に満州軍総司令部から首山堡陣地の攻撃を命じられた。首山堡でロシア軍の頑強な抵抗に遭遇し、屍山血河の惨烈な戦闘となった。三十一日の朝、一度首山堡陣地を占領した第二軍はロシア軍に奪還され、崩壊の危機に面した。九月一日に第一軍によるロシア軍左翼への側面攻撃で、第二軍はロシア軍を追撃し、首山堡を確保した。小説の中で、「渠」が二人の兵士から戦争の話をやりとりを聞いたのは三十一日の夕方であり、その時、日本軍はロシア軍と首山堡奪取戦の最中にある。

「大きな戦争になりさうだな。」  
 「一日砲声がしたからナ。」  
 「勝てるかしらん。」  
 「負けちや大変だ。」  
 「第一軍も出たんだらうナ。」  
 「勿論さ。」

小説の結末に、「渠」の死亡とほとんど同じ時間に起きた「九月一日の遼陽攻撃」というのは、激烈な戦闘でようやく確保した首山堡戦の勝利である。その後、日本軍は遼陽を目指して、ロシア軍を追撃し、四日朝までに遼陽一帯を占領することができた。後に軍神第一号となった第三師団歩兵第三十四連隊第一大隊長の橋周太少佐が戦死したのも、この首山堡であった。

遼陽会戦において、日本軍の戦死者は五五五七人で、負傷者は一七九七六人で、死傷者は十二万人の兵士総数の六分一を占めることとなった。<sup>(15)</sup> 日本は数多くの死傷者と引き換えに、遼陽会戦の勝利を手に入れた。「二兵卒」の「渠」は敵軍との戦いではなく、病との闘いで亡くなったが、兵士として、ずっと遼陽に憧れの気持ちを持っている。兵士から「遼陽が始まったでナ」と聞いた時、「遼陽！」この一語はかれの神経を十分に刺激した。「敵は遼陽の手前で、一防禦やる」という首山堡戦が始まったと聞いたとき、「渠」の心理が次のように描かれている。

一種の遠いか微なる轟、仔細に聞けば成程砲声だ。例の厭な音

が頭上を飛ぶのだ。歩兵隊が其間を縫って進撃するのだ。血汐が流れるのだ。かう思つた渠は一種の恐怖と憧憬とを覚へた。戦友は戦つて居る。日本帝国の為に血汐を流して居る。

修羅の巷が想像される。炸弾の壮観も眼前に浮ぶ(略)。

戦場にいない「渠」は聴覚と視覚を動員して、戦争の激しい場面を「修羅の巷」、「炸弾の壮観」という言葉を使って想像した。小説には「渠は一種の恐怖と憧憬とを覚えた」と書かれている。ここの「恐怖」は人間として死亡を恐れている本能のことであるが、「憧憬」は「日本帝国のために血汐を流す」、つまり命を「日本帝国」に捧げることが軍人としての使命感である。

このような使命感は日本を出発する前にすでに形作られている。「出発の時、此の身は国に捧げ君に捧げて遺憾が無いと誓つた。再びは帰つて来る気は無いと、村の学校で雄々しい演説を為た」のである。また、「豊橋を發つて来た時」、「停車場は国旗で埋められて居る。万歳の声が長く長く続く」のである。これは明らかに民衆の間に高揚しているナショナルリズムの表れである。国と天皇の召喚される中、「渠」を含めての無数の青年は日本の各地から東京に集り、近代の軍隊として組織され、異国の戦場に送られる。出発する時見送られた村人、家族の熱烈な眼差しを意識しながら、戦場で「日本帝国」のために、身を惜しまずに戦うわけである。

前述したように、強兵を組織し、日露戦争を起こしたのは、明治政府が国力を増強し、いわゆる「富国」を実現する手段である。江戸時代の士、農、工、商など身分が異なっている人々は明治政府に「国民」

と呼ばれる以上、国のために貢献するのは当たり前である。さらに「国民」の中から選出された「強兵」は、国に命を捧げることが義務付けられている。天皇制軍隊の一員として、兵士の身体は自分個人のものではなく、「日本帝国」の所有物となってしまう。

日露戦争は日本とロシアが、中国の東北地方と朝鮮を侵略する目的で行つた帝国主義的侵略戦争であるが、明治政府はいろいろ手段と方法で、戦争の正当性と正義性という幻覚を作り出した。まず、戦争の性格を「ロシアの侵略から国の独立防衛線を守るような戦争」と決めた。これにより、国の利益を守ろう、国のために戦おうというナショナルリズムを煽り立てることができた。それから、新聞や雑誌などメディアの報道を利用して、ロシア軍の残酷さと日本軍の勇敢さを宣伝する。さらに、戦場でなくなった陸軍の橘周太少佐と海軍の広瀬武夫中佐を英雄的に殉職した軍人のモデルとして「軍神」と称して、様々な軍国美談を広めた。これにより、兵士たちの士気と闘志を高め、国民の同情と支持を得ることができるようになった。他に、日本軍の正義を宣伝する軍歌を作つて、兵士たちが一緒にその軍歌を歌うことによって、日本軍の正義を内面化することが狙われる。

要するに、明治政府の働きで、日露戦争の期間中、ナショナルリズムの高揚がピークに達し、兵士たちは戦場で国のために戦い、家族は日本でかれらの安否を心にかけている。このように、戦争は兵士、兵士の家庭、兵士の故郷と関わるような最大の出来事となつたのである。

### 三 意識の身体—孤独な「病兵」の内面世界

「一兵卒」の「渠」は「日本帝国」への限らない忠誠を持って東北の野を歩き続けている。しかし、脚気病は絶えず「渠」に生理上の苦痛をもたらしている。これらの不快感に伴って、故郷回帰、戦争嫌悪などの心理変容が意識の流れとして読者に伝わっていく。この節では、文化としての病の視点で、孤独な「病兵」である「渠」の内面風景を見てみる。

病の歴史は人間の歴史と同じように古い。誰でも病を患い、その危険から逃れることはできない。病は人間の命の暗い一面として姿を現している。しかし、病にかかってからこそ、人間は自分の身体の内面にこれまでないような関心を注ぐのである。つまり、病はマイナスなものだと思われる一方で、生きがいと命の価値を考え直す契機でもある。

小倉孝誠が指摘したように、病とそれに伴う苦痛は生理学的な現象であると同時に、文化的、社会的に構築される表象でもあって、あらゆる社会と文明においてつねに同じ意味をまとうわけではないのである。<sup>(17)</sup>ヨーロッパにおいて、中世から近代にかけてもつとも恐ろしい病氣としてペストとハンセン病が挙げられる。それは「大規模な疫病と伝染病の時代」である。感染し死亡するのは個人ではなく、むしろ家族、村全体、あるいは一地方の住民の多数である。十九世紀に入ると、人々の身体を脅かすようになったのはコレラや結核などである。結核はロマン主義文学者によって美の一つの類型、恋の情熱、芸術的才能など神話化されるようになった。二十世紀に入ると、「現代の病は個別

的なものであり、病人はしばしば孤独なのだ」と指摘している。

日本の場合はどうであろうか。近代になってから、ドイツ医学を中心とする西洋近代医学が大幅に日本に移入されることもない、新しい病気が次々に発見された。人々はこの時代よりも自らの身体を対象化し、病気になるように健康に注意するようになった。その結果、日本の近代文学に結核など近代の病が様々な形で登場し、人間を蝕み、ついに死へと追いやる病気による悲劇が絶え間なく見られるようになった。

前述したように、日露戦争の時代、脚気病に患う兵士は圧倒的に多くて、「国民病」とも呼ばれている。しかし、小説「一兵卒」の「渠」は孤独な人間としてまわりの兵士と差異化されている。病院の不潔な環境を理由に無理に退院したのは「渠」一人だけであり、様々な内面世界を読者に見せるにも関わらず、他の兵士の目にもただ「病兵」として映っている。

では、「渠」の内面世界を探ってみよう。  
まず、生理上の苦痛に伴うのは、故郷、幼少年時代への回帰願望である。「過去の面影と現在の苦痛不安とが、はつきり区割を立てゝ居りながら、しかもそれがすれすれに摺り寄つた」こととなる。「過去の面影」は、一つの意識の流れとなつて、生理上の苦痛の切れ間に浮かびあがってくる。最初に出た「過去の面影」は、汽車が眼に入る時である。

ふと汽車—豊橋を發つて来た時の汽車が眼の前を通り過ぎる。

停車場は国旗で埋められて居る。万歳の声が長く長く続く。と忽

然最愛の妻の顔が眼に浮ぶ。それは門出の時の泣顔ではなく、何うした場合であつたか忘れたが、心から可愛いと思つた時の美しい笑顔だ。母親がお前もう起きよ、学校が遅くなるよと揺起す。かれの頭はいつか子供の時代に飛返つて居る。裏の入江の船の船頭が禿頭を夕日にてかてかと光らせながら子供の一群に向つて嗚つて居る。其の子供の群れにかれも居た。(傍線引用者、以下同)

現実の汽車を見たのをきつかけに、記憶の中に存在する汽車を思い出す。それは、出征する時の場面につながるため、豊橋の「国旗で埋められて居る」光景、「万歳の声」が、意識の主体である現在の「かれ」にあらためて作用する。それから、時間が遡行し、妻の笑顔、母の姿と子供時代の遊びが、次から次へと主人公の頭に浮かび、回想の対象となる。この一段では、語り手は主人公とほぼ一体化し、二箇所傍線部以外は、「かれ」が一人称である心理描写を行っているかのような印象を読者に与える。語り手と主人公が重層的に交錯し、相互に転換しながら、現在囁目の光景から、不可視の心的映像に至るまでが表現されている。<sup>(18)</sup>

故郷への思い出と同時に現れてくるのは現実世界への憎悪である。次の引用は眼の前の道を見て頭に浮かんでくる場面である。

褐色の道路——砲車の轍や靴の跡や草鞋の跡が深く印したまゝに石のやうに乾いて固くなつた路が前に長く通じて居る。(略) 故郷のいさゝ路、雨上りの湿つた海岸の砂路、あの滑かな心地の好い路が懐かしい。広い大きい道ではあるが、一として滑かな平かな

処が無い。これが雨が一日降ると、壁土のやうに柔かくなつて、靴どころか、長い脛も其半を没して了ふのだ。大石橋の戦争の前の晩、暗い闇の泥濘を三里もこね廻した。

褐色の道を見て、主人公は故郷と戦争のエピソードを回想する。故郷の道は、「心地の好い」、「懐かしい」印象である。一方、道に刻まれる大石橋の戦争の記憶は、「暗い闇」、「厭な音」で充填されている。このように、故郷への甘美な思い出は、戦争への残酷な思い出と相次いで前景化され、主人公の故郷回想、戦争嫌悪が、無意識のうちに示されている。

次の追憶は、草叢の虫の鳴き声を聞いた時である。今度の記憶の対象は、東京で修学した時のことである。

故郷の野で聞く蟲の声とは似もつかぬ。この似もつかぬことと広い野原とが何となく其の胸を痛めた。一時途絶えた追懐の情が流るゝやうに漲つて来た。

母の顔、若い妻の顔、弟の顔、女の顔が走馬燈のごとく巡回する。樺の樹で囲まれた村の旧家、團欒せる平和な家庭、続いて其身が東京に修業に行つた折の若々しさが憶ひ出される。神楽坂の夜の賑ひが眼に見える。美しい草花、雑誌店、新刊の書、角を曲ると賑やかな寄席、待合、三味線の音、仇めいた女の声、あの頃は楽しかった。恋しい女が仲町に居て、よく遊びに行つた。丸顔の可愛い娘で、今でも恋しい。此の身は田舎の豪家の若旦那で、金には不自由を感じなかつたから、随分面白いことを為た。

戸松泉が指摘した通り、小説の前半は汽車、道、虫の音などの外界によって、さまざまな反応を示す「渠」の意識が主として追われている。そこに色濃く見られるのは、故郷、家族共同体への回帰願望である。作品の末尾で、「故郷のさまが今一度其の眼前に浮ぶ。母の顔、妻の顔、樗で囲んだ大きな家屋、裏から続いた滑らかな磯、碧い海、馴染の漁夫の顔……」というように、当初浮んだ故郷の映像が「今一度」末期の「渠」の目に浮ぶのであり、一貫して底流する意識として繰り返されていることは明らかである。主人公「渠」の意識は四方八方に発散し、また出発点に戻る。このような活動の繰り返しで、網状的立体的な構造を成り立たせる。

これらの故郷、家族への思い出は、意識の流れとして脚気病発作の隙間に現れ、積み重ねた挙句、強烈な戦争嫌悪となつてしまった。

(略) 今忽然起つたのは死に対する不安である。自分はとても生きて還ることは覚束ないといふ気が烈しく胸を衝いた。此の病、此の脚気、假令此の病氣は治つたにしても戦場は大なる牢獄である。(略)

かれは疲労と病氣と恐怖とに襲はれて、如何にしてこの恐ろしい災厄を通るべきかを考へた。脱走？それも好い、けれど捕へられた暁には、此の上も無い汚名を被つた上に同じく死！さればとて前進すれば必ず戦争の巷の人とならなければならぬ。戦争の巷に入れば死を覚悟しなければならぬ。

天皇制軍隊の兵士として、この時の「渠」の考えはすでに天皇を裏切つたことを意味する。病がもたらす肉体的苦痛が激しくなつてくる中、「死に対する不安」が凄まじい力をもって「渠」を襲いかかった。戦場は天皇に命を捧げる場ではなくなつて、「大なる牢獄」となつてしまふ。「脱走」にしる「前進」にしる、死という運命は避けられないという理不尽な気持ちが続いてく。明治政府が上から植え付けた忠君愛国という神話が破られてしまった。

#### 四 死亡の意味—国家の所有から解放された身体

「一兵卒」の後半では、脚気の昂進を身体的に自覚した「渠」がいよいよ死という現実と対面していく姿が描かれる。場面は広漠の野から兵站部の洋館へと移る。洋館の一室は「渠」の臨終の場となる。ここで、脚気衝心が、ついに始まつてしまうのである。

その後、「渠」の苦痛との戦いの様子、死に立ち向かう過程が語られていく。そして、語り手は次第に「渠」の身体から遊離し、距離を保つていくことになる。前半に頻繁に使われる「自由間接話法」による「渠」の心理描写が減少し、語り手の説明的叙述によつて、「渠」の苦しむ姿が語られる。

「自然と身体を藻掻かずには居られなくなつた。綿のやうに疲れ果てた身でも、この圧迫には敵わない」、「潮のやうに押し寄せる。暴風のやうに荒れわたる。脚を固い板の上に立て、倒して、体を右に左に腕いた」、「疼痛は波のやうに押し寄せては引き、引いては押し寄せる。押し寄せる度に唇を噛み、歯をくひしばり、脚を両手でつかんだ」。語り手

は間断なく襲う疼痛を、できる限り「渠」の身に即して表現しようとする。「渠」を襲う生理的疼痛の大きさを、「潮」、「暴風」、「波」という自然の力に譬えて説明しているように、語り手がここで物質的（自然）としての人間の側面を強調していることは明らかにになった。（自然）の力としての肉体的苦痛に圧倒されている人間の姿が繰り返し提示される。<sup>(20)</sup>

このような巨大な苦痛に圧迫される「渠」は、もう「過去の面影」、死への不安など、意識の領域をぜんぶ喪失してしまう。

故郷のことを思はぬではない、母や妻のことを悲しまぬではない。此の身がかうして死ななければならぬかと嘆かぬではない。

けれど悲嘆や、追憶や、空想や、そんなものは何うでも好い。疼痛、疼痛、その絶大な力と戦はねばならぬ。

(略)

彼は既に死を明らかに自覚して居た。けれどそれが別段苦しくも悲しくも感じない。二人の問題にして居るのはかれ自身のことではなくて、他に物体があるやうに思はれる。唯、此の苦痛、堪へ難い此の苦痛から脱れ度いと思つた。

生理的痛みは人間から「悲嘆」、「追憶」、「空想」、そして、死への恐怖という形而上的なものを奪う。人間における生理的苦痛は絶大な力を顕示する。

また、物質的（自然）としての主人公の姿が傍にいる語り手によって観察、再現されるだけでなく、ほかの登場人物の眼差しや、言葉

で捉えられることになる。例えば、脚気衝心の苦痛に襲われた主人公の姿が次のように酒保の目に映っている。「病兵の顔は蒼褪めて、死人のやうに見えた。嘔吐した汚物が其處に散らばつて居た」。前半では「悲嘆」、「追憶」など奥深い内面世界を示した主人公だが、ここに至って、不潔な「病兵」になつてしまった。

死を迎える直前、「渠」の名前とアイデンティティーはようやく明らかになった。「十八連隊の兵だナ」という酒保と兵士が「渠」の身分についての会話が「渠」の耳に入った。

兵士がかれのポケット隠袋を探つた。軍隊手帖を引出すのが解る。かれの眼には其の兵士の黒く逞しい顔と軍隊手帖を読む為に卓上の蠟燭に近く歩み寄つたさまが映つた。三河国渥美郡福江村加藤平作……と読む声が続いて聞えた。

「渠」は「三河国渥美郡江村加藤平作」という個人の名前を獲得し、日露戦争の無名な兵士ではなくなった。この時点で、「渠」の身体はもう国の管理を離れて、「渠」自身のもつて帰ってくるのだらう。

戦争に動員された兵士たちは、戦場で戦死するか、または脚気病などで病死するか、どちらにしても、異国の地で命を落とす運命を免れない。「二兵卒」の「渠」の物語は、「日本帝国」は兵士の命を選別し、日常的に序列化したうえで管理し、支配し、さらに蹂躪しようとすることを如実に示している。

おわりに

「一兵卒」を発表する一年前の一九〇七年一月に花袋は脚氣衝心を題材に「隣室」を創作した。旅先の宿屋で、「私」の隣室に泊まりあわせた男は脚氣衝心で死んだ経緯を、「私」が聞いたり、見たり、感じたりすることによって語られた小説である。病人の状態、宿屋全体の状況を、語り手「私」の主観的感慨を介して捉えられる。一年の隔たりで、花袋は再び脚氣衝心の題材にチャレンジする。脚氣衝心という共通する題材を繰り返し作品化することによって、異なる文体を試みる花袋の意欲が明らかになる。「一兵卒」は脚氣を患う「渠」自身の聴覚、視覚、感覚で、死亡するまでの肉体的苦痛を再現する。病氣にかかっている主人公の生理的苦痛と、その切れ間に浮かび上がってくる断片的な妄想と、死に至るまでの深層心理が一つの意識の流れとして描き出される。

「隣室」と比べると、「一兵卒」の新しさは文体の試みだけではなく、戦場という空間の設定も並々ならぬ意味を持っている。明治国家の強兵として戦場に送られる「渠」は「忠君愛国」という国民的義務を内面化し、「日本帝国」に身体を捧げる覚悟をさせられる。しかし、連隊から遊離し、異国の大地を歩きつつある「病兵」の孤独による故郷回帰、現実嫌悪、さらに戦場脱走などの考えが「忠君愛国」を潰し、無効化してしまう。

注

- (1) 戸松泉「隣室」から「一兵卒」―脚氣衝心をめぐる物語言説―『日本近代文学』第五十三集、一九九五年十月
- (2) 内田正夫「日清・日露戦争と脚氣」(和光大学総合文化研究所年報『東西南北』、二〇〇七年)
- (3) 池田功「脚氣の文化史―啄木「夏の街の恐怖」を分析しつつ」『明治大学人文科学研究紀要』五十四号、二〇〇四年三月
- (4) 注(3)に同じ
- (5) 富士川遊「脚氣病の歴史」『富士川遊著作四』思文閣出版、一九八一年六月 11～22頁
- (6) 山下政三『脚氣の歴史―ビタミン発見以前』(東京大学出版会、一九八三年二月)
- (7) 酒井シヅ『病が語る日本史』(講談社、二〇〇八年八月) 175頁
- (8) 立川昭二『病氣の社会史』(岩波書店、二〇〇七年四月) 242頁
- (9) 注(3)に同じ
- (10) 注(2)に同じ
- (11) 注(3)に同じ
- (12) 立川昭二『病氣の社会史』(岩波書店、二〇〇七年四月) 241頁
- (13) 『歴史群像シリーズ五十九号 激闘旅順、奉天―日露戦争陸軍・戦捷』の要諦』(学習研究社、一九九九年八月) 72頁～73頁
- (14) 海野福寿編『日本の歴史⑧日清・日露戦争』(集英社、一九九二年) 160頁
- (15) 海野福寿編『日本の歴史⑧日清・日露戦争』(集英社、一九九二年) 161頁

- (16) 長山靖生『日露戦争 もう一つの「物語」』(新潮社、二〇〇四年一月) 頁
- (17) 小倉孝誠『身体の文化史―病・官能・感覚』(中央公論新社、二〇〇六年四月) 167頁
- (18) 川上美那子「自然主義文学の表現構造―田山花袋「重右衛門の最後」から「生」へ」『人文学報』二〇七号、一九八九年三月)
- (19) 注(1)に同じ
- (20) 注(1)に同じ

【付記】「一兵卒」のテキストは『定本花袋全集 第一巻』(臨川書店、一九九三年四月)を使用した。旧字は新字に改めた。本稿は大連外国語大學二〇二二年度科学研究基金の助成を受けた研究成果の一部である。

(おう ばい、大連外国語大學日本語学院準教授)